

# 「自我－自己」からみた青年心理学研究

— 意義と問題点、今後の課題 —<sup>註1</sup>

溝 上 慎 一 (高等教育教授システム開発センター)<sup>註2</sup>

水 間 玲 子 (教育学部大学院)<sup>註3</sup>

## はじめに

高等教育の研究は、近年ますます盛んになりつつある。しかしその内容は、専ら組織論や制度論、カリキュラム論であり、主人公である学生のあり方を論じる研究はきわめて少ない。さらに、それを系統的・概念的に述べたものと限定すると、おそらく数本であろう。

ここでは、学生の内面世界を系統だてて扱っていく礎として、従来から扱われてきた「青年心理学 (Youth and Adolescent Psychology)」をとりあげる。青年心理学は、とくに高等教育の学生を中心にみたものではないが、大学や専門学校といった社会に出る前の教育機関の在籍期に理論の重要事項の多くが存在する。その意味では、青年心理学をベースに高等教育論を構築していくことは、年月はかかるにせよ、もっとも近道であると思われる。

## 第1節 青年心理学を「自我－自己」概念から読みかえる

### 青年期の問題は主体性

Erikson の提唱した「アイデンティティ危機 (identity crisis)」が、青年期の大きな問題として据えられることが多い。これは岩瀬庸理によって「主体性の危機」と訳されたように、青年期の大きな問題が「主体性に関わる問題」であることを意味している。主体性とは、主体である自我が能動的に環境に働きかけている状態を指すから、青年期で主体性が問題になるということは、そのまま主体である自我のあり方が問題になっているとすることができる。

本稿では、青年心理学を「自我－自己」の観点からまとめてみる。それは、青年期を主体のあり方が問題になる時期だととらえて、最も有効な観点が「自我－自己」の観点だと思われるからである。

### 疾風怒濤から自我の否定性へ

従来、青年期の特徴は「疾風怒濤 (Strum und Drang)」、すなわち否定的な嵐の到来の時期だとされてきた。これについても本稿では、「自我の否定性」と置き換えていきたい。

青年期の特徴を疾風怒濤とせず自我の否定性とするのは、筆者らが青年心理学を「自我－自己」の観点からとらえなおそうとしているからでもあるが、もう一つ大きな理由がある。それは、青年期の否定性が、単なる否定的な状態というのではなく、「自分を知る」という生産的過程での否定性を文脈としてもっているからである。

人は、自己概念や価値をほとんど自覚することなくつくりあげている。人は、様々な場面でその人らしい様々な行動や思考をするが、そのベースとなる自己概念や価値がどんなものであるかは気づかれにくいことが多い。この無自覚的な自己概念や価値の機能に気づき始める最たる契機が、青年期である。

いろいろな青年心理学者によって、青年期における様々な特徴が挙げられてきた (例えば「自我の発見」(Bühler, 1921/1967; Spranger, 1924; 1925; Hollingworth, 1928)、「心理的離乳」(Hollingworth, 1928)、「第二の誕生」(Rousseau, 1762; Hall, 1904/1969)、「時間的展望」(Lewin, 1951)、「アイデンティティの確立」(Erikson, 1950/1963; 1959) 等)。そして、これらを通して自我が否定性をともなうことも、あわせて論じられてきた (cf. Hall, 1904/1969; Bühler, 1921/1967; Spranger, 1924, etc)<sup>註4</sup>。それは青年が、様々な未知の世界を経験することで、主体のあり方を規定している自己概念や価値の機能を自覚しはじめることからくるものである。

このように、青年期の特徴は、ただ否定的な嵐の到来というだけではなく、「自分を知る」という文脈に特徴がある。「自我－自己」の観点は、自分を知ろうとする文脈においては最も有効な観点であり、ここに、青年期の特徴を「疾風怒濤」とせずに「自我の否定性」とする大きな理由がある。

さらに、青年期の特徴を疾風怒濤とせず自我の否定性とすることには、次の2つのメリットもある。

第一に、否定のレベルをいろいろと考慮することができる点である。疾風怒濤を用いれば、青年は大きな否定的様相に包み込まれ、社会生活もろくに営めていないイメージを抱かれてしまうが、否定性を用いれば、「否定的」というレベルは、ちょっとした葛藤から大きな悩みまで幅広く扱うことができる。第二に、否定の質を考慮することができる点である。自我が否定的になっている問題を対象化した自己の問題ととらえれば、それは対人場面や身体、将来、学校など様々な質として扱っていくことができる。青年期が否定的な時期だといっても、その否定の質は、親との喧嘩による葛藤から人生上の危機までまったく多様である。否定の質を考慮することによって、青年の否定性は多様となるのである。そして、このような質の意味を考慮していくためには、疾風怒濤ではなく自我の否定性としていかなければならない。

## 第2節 自我の否定性

### 自我が否定的になるメカニズム

なぜ青年期が否定的になりやすいのかと言えば、端的に、自我のおかれる環境が変化することによって、数多くの新たな経験をするからである。経験は、それまでもっていなかったような価値や理想を取り込むこととしても機能するし、それまでもっていた自己概念や価値を揺さぶるものとしても機能する。それまでもっていた自己概念や価値が揺さぶられ、自我が否定的になることは言うまでもないが、新たな価値や理想を身につけた場合でも、現実の自我が思うように動くことはそう多くないから、結果としてこの場合も自我は否定的となりやすい。

よく、Bühler (1921/1967) が「自我の体験」と表現する「自我が突如その孤立性と局限性において経験される独特の体験」(Bühler, 1921/1967) が、青年期のはじまりを象徴する出来事とされる。このメカニズムも、まったく同様である。自我体験の契機は、友人との対立的葛藤が最も多く(宮脇、1984)、山田(1979)の日記分析にもみられるように、自己と他者が別個の存在であって越えがたい壁が両者の境をつくっていると気づく自我-遠和的体験が多い。つまり自我体験とは、自我が暗黙のうちに抱いていた他者概念が、自我の孤立性と局限性という新たな経験とずれたことによって感じるものである。

それでは、どのような自我の環境が具体的に変化して、青年は否定性を帯びるのだろうか。Lewin (1951) を参考に、大きく3つを挙げてみたい。

第一に、身体的-性的成熟にともなう「新しい身体環境への変化」である (cf. Hall, 1904/1969; Spranger, 1924; Bühler, 1921/1967; 青木、1938/1948; 依田、1950; 望月、1951; 野上、1954/1959)<sup>85</sup>。月経のはじまりとそれに伴う不快感や痛み、つきあげる性的衝動や恥ずかしさ、変声期における自分ではないようなかすれた声、理想像とはかけ離れたやせ過ぎた、あるいは太りすぎた身体。それらはいわば、自分のなかに侵入してきた自分ならざる新たな経験であり(山本、1984)、そのような身体の外貌と体の大きさについての新しい認知は、それ以前の古い身体像(身体に関する自己概念)との間に衝突を起こす(野辺地、1972)。つまり、それまでもっていた身体に関する自己概念が、身体の成熟に伴って経験する新しい身体と一致しないことで葛藤が生じるのである。このことは自我が、それまでとは違う新しい身体という内的環境におかれるようになったことを意味している。

第二に、おとな社会へと活動領域が拡大することによって生じる「活動環境の変化」である。青年期はおとな社会に徐々に近づいていく時期なので、児童期までに過ごしていた活動環境が、おとな社会へと徐々に拡大していく。小山田(1971)はこれを「social contactの拡大」と表現する。そこでは、おとな社会の価値や役割に触れそれを新たな経験として摂取していくこともあるし、友人との語り合いの中でおとなの価値を情報として得ていくこともある(例えば、異性とのつきあい方や酒やタバコなど)。これらの経験は、青年の主に価値に影響を及ぼし、青年は自我にその価値にみあったあり方を期待するようになる。ところが自我というものは、児童期までに様々な経験を通して大方つくりあげられているので、それを変えていこうという試みは大方のところ失敗に終わる。

第三に、社会人(おとな)としてやっていく実感が出る「時間環境の変化」である。青年は、児童期までと異なり、おとなとして社会生活を営むまでのスパンが短くなってきたことを実感する。それによって、人生をどうするか、将来何になりたいかなどの価値の問題が、自己概念や経験と照合する形で現実性を帯びてくる。つまり、「将来は〇〇でありたい」と願うことが、現状の自我のあり方や活動経験を顧みてもやっていけるかという確信(未来との連続的

感覚)を得ることができるかどうかを吟味するようになるのである。Lewin (1951) は、これを「時間的展望の分化」と呼び、子ども時代の単なる夢と区別する。ところが多くの場合、人生の選択や決定はそうたやすくなされるものではない。将来のあり方を仮に見つけたとしても、現状の自分は、見出した将来の自分に「連続性 (continuity)」を感じとれるものではなかなかない。不本意な選択・決定をしなければならず、将来の価値を見出せないこともよくある。例えば、進学校の選択を迫られ、希望してではなく仕方なく選んだ第二志望のコース (学校、学部、学科など) で勉強をやらざるを得なくなったときや、高い自尊心をもった青年が勝ち目のない生存競争を強いられたときなどである (山本、1984)。

以上述べてきた、自我のおかれる環境の変化は、青年期独特の発達の文脈と言えるものである。そこで生じる新たな経験が、新しい自我のあり方に向けて機能するパラダイムは、実は、溝上 (1998) で述べる自我と経験の問題、あるいは自己受容と経験の問題とまったく同じなのである。違うのは、その契機となる経験が、青年期独特の文脈に支えられているか否か、ということだけである。

### 自我の否定性を助長する要因

自我の否定性を助長する要因もある。ここでは、3つ挙げよう。

第一に、情緒の不安定さである。青年期のはじめが「思春期 (puberty)」と生理学の用語で語られることがあるように (cf. Bühler, 1921/1967)、この時期は第二次性徴のはじまりの時期である。身体が急速的に成長し、性器がおとなのものへと成熟し始める。成熟にともなうホルモンの分泌など、生理的事情が情緒に影響を及ぼし、青年の情緒を不安定な状態にさせる。

第二に、他者の視線の的となる身体の実現性である。自我のおかれる環境の変化を大きく3つ挙げたが、その中でも身体は、他者の視線の的となり現実性が大きい (野辺地、1972)。そのため、自-他の比較が生じやすくなる。ここでは、単なる身体の問題ではない、時には人生の問題としての否定性を帯びることさえある。たとえば、まわりは皆おとなの身体になっていくのに、自分だけが子どもの体型から変わらない。もしかしたらこのままずっといくのかもしれない。背が低いと馬鹿にされているようで、あらゆる活動を自信をもってやっていけない、というような場合である。身体について友人などからかわれたり、第三者に指摘されたりしたとき (山本、1984) などには、特にそうなるようである。

第三に、認知能力の発達があげられる。青年期は、Piaget の言う形式的操作による思考能力の獲得期として位置づけられる (Piaget, 1972)。これは、主体としての自我を対象化・意識化しようとする自己意識が芽生えることでもある。自己概念研究の「あなたは誰ですか・テスト (Who are you test)」や「20答法 (Twenty Sentences Test)」といった制限的自由記述法による調査結果からは、おおよそ12歳前後の子どもから、自我を対象化しはじめる自己意識の高まりを確認することができる (Montemayor & Eisen, 1977; Noppe, 1983; 菊池、1970; 遠藤、1981; 藤井、1984; 山田、1981; 1989)。これは、「私は誰ですか」といった、回答者からしてみれば一見訳の分からぬ問いに無理矢理答えさせたときに表出される特徴によって明らかにされたものである。このような一見訳の分からぬ問いに無理矢理答えさせる方法論は、投影法に理論的根拠を求めることができるが (堀尾、1981)、いずれの場合も意識度・関心度の高い内容が表出され (McGuire & Padawer-Singer, 1976; McGuire, McGuire, Child & Fujioka, 1978; McGuire & McGuire, 1980; 溝上、1995a; 1995b; 1997)、かつ個人のもつ生活の場、意識の場と関連性の高い内容が表出される (cf. Markus, 1977; 1983; Markus & Smith, 1981)。よって、このような投影的方法論で自己記述が加齢とともに多く表出される事実は、年齢とともに自己意識が高まることと理解されるのである。

青年は、この操作能力のおかげで、他人の内面を考慮したり、それを通して自分を見つめたりすることが可能になってくる。それゆえ青年は、他者が自分をどう見ているのかといったことを過剰に意識したり (Elkind, 1967; 1970; Elkind & Bowen, 1979; Harter, 1983; 1990)、あるいは他者から評価されたいと願うようになる (Spranger, 1924; 吉川、1960)。その際には自己意識 (self-awareness)<sup>86</sup> も高まるため (Rosenberg, 1979; Harter, 1983)、自我の欲求や、親、教師の価値と自らの価値との相違などに気づいたりする。結果として、自我は否定性を帯びる。

また、この操作能力のおかげで他者の内面を考慮するようになる。しかし、青年の初期の段階では、自-他の評価や経験、思惑などがまだ未分化な「自己中心性 (Egocentrism)」 (Elkind, 1967; 1970) のため、すべての人間に共

通の経験と自分に固有の経験とを必ずしも区別できない。自分に固有の経験を他のすべての人と共通であると考えてしまうことがあるため (Elkind, 1967 ; 1970)、他者の内面に意識を傾けることが、結果として自我の内面的葛藤を引き起こす。

以上、自我の否定性に関わる要因をまとめると、Fig. 1 のようになる。

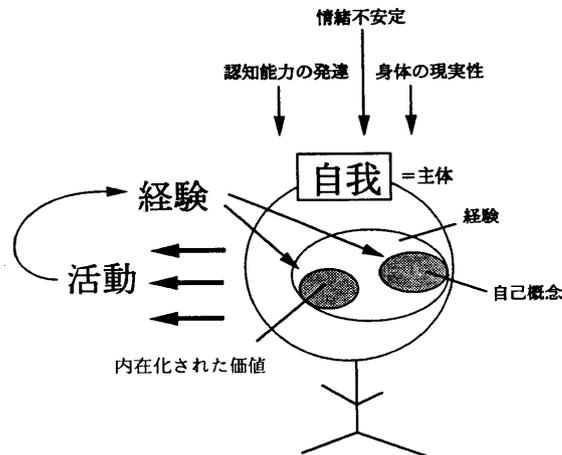


Fig. 1 経験による自己概念・価値の動揺

#### 自我が否定的になる問題領域

自我のあり方が問題となる領域は、青年期初期と後期とでは随分異なる。どのあたりまでの時期が初期で、どこからが後期とは言えるものではないが、青年期初期にみられる自我の否定性に関わる問題は、「現状の自我のあり方」における問題であるように思われる。

例えば、「自分はクラスでどうみられているのだろうか」(準拠集団での位置づけ) や「嫌なことは嫌と言いたい」(他者との接し方)、「もっと明るくなりたい」(性格)、「女の子(男の子)とつき合いたい」「彼氏(彼女)がほしい」(性)、「太ってきた」(身体)、「毎日だらだらしている。こんなことでは駄目だ」(生活や習慣) などである。以下では、このような現状での自我のあり方が問題となる領域を「水平軸」の問題領域と呼ぶ。そして、水平軸の問題領域において自我が否定的になるのは、決してこの時期にのみ特有ではない。次に述べる青年期後期においてはもちろんのこと、成人期以後も度あるごとに問題になるものである。

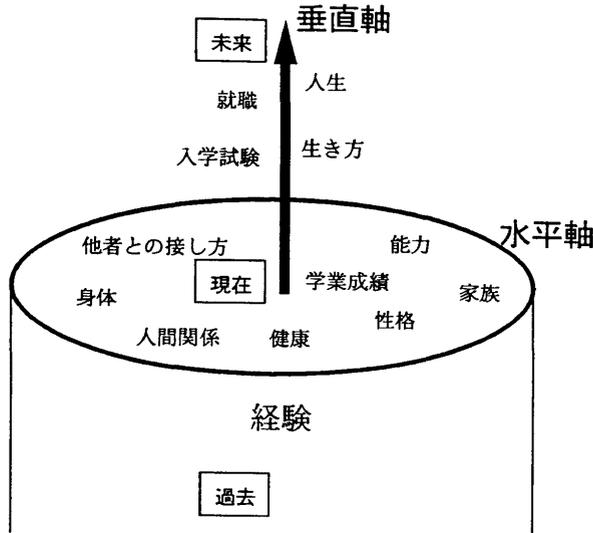
青年期も中期を過ぎたあたりから、おとな社会により多く触れるようになり、活動空間が広がる。それにともない青年は、水平軸の問題領域にとられるのみならず、少しずつ来たるおとな、社会人としてやっていくにあたっての未来の自我のあり方についてとられるようになる。

この未来の自我のあり方としての問題には、具体的な問題(目標)と、自己の存在意義などの抽象的な問題の2つがある。前者には、「どんな職業につけばいいだろうか」(将来の職業)や「結婚はいつ頃しようか」(結婚)、「結婚はせず好きな仕事をしよう」(生き方)などが挙げられるし、後者には「自分はなぜこの世に生を受けたのだろうか」(自己の存在意義)や「自分は何のために生きているのだろうか」(人生の意味)などが挙げられる。ともに、これまで青年期の発達課題としてあげられてきた価値の探求でもある (cf. Havighurst, 1953 ; 桂, 1977)。青年期のアイデンティティ拡散の症例としてあげられる人生目標の喪失や職業観に関する混乱は、この問題による自我の否定的状態ととらえられる例である (例えば、Erikson, 1950/1963 ; Erikson, 1959 ; Erikson, 1968 ; 山村, 1980)。

青年の手記をつぶさにたどった岡本の著『若き日の自画像』(1947)では、自己の存在意義について悩む青年の具体的様相が描かれている (他にも Bühler, 1921/1967)。例えばある青年は、「最近私のこころの中には、自己というものを真赤裸にし、完膚なきまでに批判し、骨の髄までに之を解剖し、然る後之を体系づけ、一段と高い境地から自己の姿を眺めてみたいという熾烈な内部の要求が鬱勃として湧き立ってくるのを感じる」(p. 73)、「僕は自分の正体を認識しようとしてどれだけ苦しんだか知れない。自我とは一体何処にあってどんなものなのだろうか、手探りしても手応えが無い。探求しても見当たらない。自分の才能・能力は何? 幾ら考えても分からない。」(p. 79)と書

いている。

このような問題は一瞬先以降の未来の自我のあり方ではあっても、現在の自我のあり方に大きな影響を及ぼすものである (Lewin, 1951)。この点、現在のあり方に影響を及ぼさない小さな子どもの単なる夢とは異なる。以下では、未来の自我のあり方が問題になる領域としての生き方や人生の意味、就職や結婚などの問題を、「垂直軸」の問題領域と呼ぶ。これらをまとめると、Fig. 2、3となる。



- (注1) 水平軸…他者との接し方や身体、生活や習慣など、日々生活する中で問題となる領域
- 垂直軸…未来の時間幅をもつ人生や生き方に関わる問題領域
- (注2) 経験(過去)は、水平軸・垂直軸の問題を生じさせるもととなっている。一見過去の問題に悩んでいるようであっても、それは過去の自分と連続した現在の自分に悩んでいるのであり、あらゆる問題は経験(過去)をベースとしている。

Fig. 2 青年の自我がゆらぐ領域 (水平軸・垂直軸)

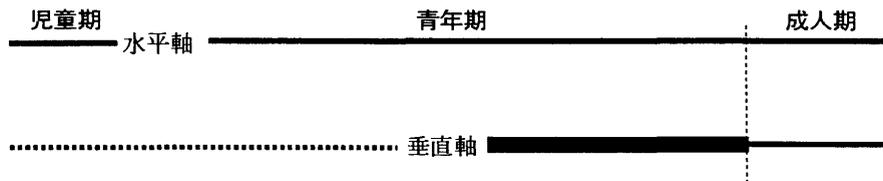


Fig. 3 水平軸・垂直軸の領域が問題となる時期

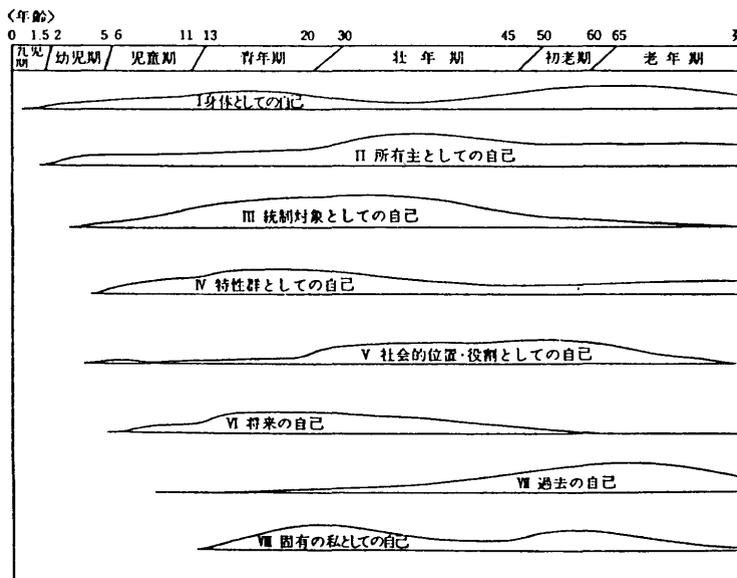


Fig. 4 人生の各時期における自己意識の内容の変化 (梶田、1980/1988、p. 150)

また筆者らは、自我が否定的になる問題領域を水平軸、垂直軸の領域として便宜上二分したが、梶田の人生における自己意識の内容の変化のスケッチ (Fig. 4 : 梶田、1980/1988、p. 150) も、ほぼ同じことを示しているものとし

て紹介しておく。そこでは、垂直軸の領域である「将来の自己」は青年期においてのみ特有のものとなっている。また、筆者らが水平軸の領域と表現する他の「身体としての自己」「統制対象としての自己」「固有の私としての自己」などは、青年期に限らず壮年期や老年期においても問題となっている<sup>47</sup>。

このように、青年の自我が否定的になる問題には、青年期を終えてからも生涯続くと思われる、他者との接し方や人間関係、性や身体、生活や習慣などの水平軸の領域と、青年期において特に顕著となる人生や生き方をめぐる垂直軸の領域とがある。青年期は、垂直軸の問題領域をめぐっての自我の否定性だけで論がすすめられることが少なくないが、青年期は水平軸の問題領域をめぐっての自我の否定性をも含めたなかで理解されていくべきものである。

### 青年期における自我の否定性の意義

青年の自我が否定的になりやすいのは、以上述べてきたように、青年期独特の文脈から生じる新たな経験ゆえである。青年は、新たな経験を通して、新しい価値に出会ったり他者から価値を吸収したりする。様々な理想や目標を立て、自我のあり方に大きな可能性も期待する。結果として思うようになることはそう多くないのだが、そのような経験とのぶつかりを通して、青年は自分がどういう人間で、何ができ、何に関心をもつのか、を知っていく。そして、社会の規範や価値、現実なども知っていく。経験とのぶつかりは、自我を否定的にさせるが、それは青年の新しい自我のあり方に向けての契機といえるものである。

このようなことから、子どもからおとなへの「過渡期」(依田、1950；津留、1970/1976；桂、1977)である青年期は、自我の否定性を通して、自我を再構築していく意義をもっている。

青年の自我の否定性が、現象的には神経症および精神病の症状などと類似性が高いが、これも青年期独特の発達の文脈の中でとらえねばならない。青年の場合、現在の適応という観点からみて病気とするのではなく、人格形成・生涯発達の観点からみて「正常な発達の危機」(Erikson, 1950/1963；1959；Fridenberg, 1959；A. Freud, 1936/1966；Blos, 1962；Phillips & Zigler, 1961；Achenbach & Zigler, 1963；Katz & Zigler, 1967；加藤、1977；1987；水間、1998)とみなすものなのである。現象的には同じ否定性であっても、否定性をつくりだしている文脈は青年期独特のものである。

## 第3節 青年心理学における実証的自己研究

実証的研究におけるデータの産出過程は、自己論のパラダイムであるから(溝上、1998)、実証的研究での青年の自我は、「自己」として扱われることになる。

このことを前提とした上で、これまでの青年心理学における実証的自己研究を振り返ってみると、大きく「自己評価」研究と「自己概念」研究とがある。ここでは、それぞれがどのようにしておこなわれてきたかをみてみよう。

### 自己評価研究

青年の自我が否定的であることは、「自己評価尺度」(Simmons, Rosenberg & Rosenberg, 1973；Demo & Savin-Williams, 1983；McCarthy & Hoge, 1982；平石、1988；1990)や「自己受容尺度」(宮沢、1979；伊藤、1991)、「理想自己と現実自己とのズレ」(Miller & Worchel, 1956；Altrocchi, Parsons & Dickoff, 1960；Lombardo, Fantasia & Solheim, 1975；Winkler & Myers, 1963；権野、1966；森下、1970；山根、1972)、「チェックリストによる受容・評価指数」(加藤、1962；1977)、「自己記述への評価」(菊池、1970)などの、様々な自己評価に関する指標を用いて検証されてきた。自己評価は、自我のあり方に対する満足度を調べる指標であるから、細かい尺度の違いはあっても、自己評価の指標を用いることに問題はない。しかし、その用い方には問題がある。

多くの研究は、中学生から大学生までの年齢幅をサンプルとして収集し、自己評価が否定的か否か、安定しているのか否か、自己評価が下がるとすればどの時期か、という問題を論じてきた。しかし、自己評価を規定する自己概念や価値などの質的意味をほとんど考慮することなく、年齢や発達時期による自己評価のアップダウンだけを論じてみても、それに大した意味を見出すことはできない。

年齢によって自己評価の得点に変化がなければ、まだいい(cf. 伊藤、1992)。また、自己評価の得点が増加傾向(Bachman & O'Malley, 1977)、あるいは減少傾向(伊藤、1991；平石、1993)であってもいい。しかし実際には、

Fig. 5 のように、年齢によって自己評価がアップダウンしていることの方が多い(例えば、Hess & Bradshaw, 1970 ; 加藤、1962 ; 1977 ; 菅、1975 ; 平石、1988 ; 1993)。結果を記述することはできるが、なぜそうなるかについてはまったく言及できない。この類における考察の仕方を、加藤 (1977) から引用してみよう。

本研究の場合、男子においては社会的規準からみると、高校生において自己受容(自己受容指数 I) がやや低く、自己批判(自己批判指数 I) がやや高い傾向がみられ、自己の規準からみると、高校生、大学生になるにつれて自己受容(自己受容指数 II)、自己批判(自己批判指数 II) がともに低くなる傾向がみられた。

これに対し、女子においては社会的規準からみた場合も自己の規準からみた場合も、高校生、大学生になるにつれて自己受容(自己受容指数 I・II) が低く、自己批判(自己批判指数 I・II) が高くなる傾向を示した。全般的にみて、中学生がもっとも自己受容的であり、高校生、大学生においては自己受容的傾向が低くなるといえる。(カッコは筆者らが補足)  
(加藤、1977、pp. 26-27)

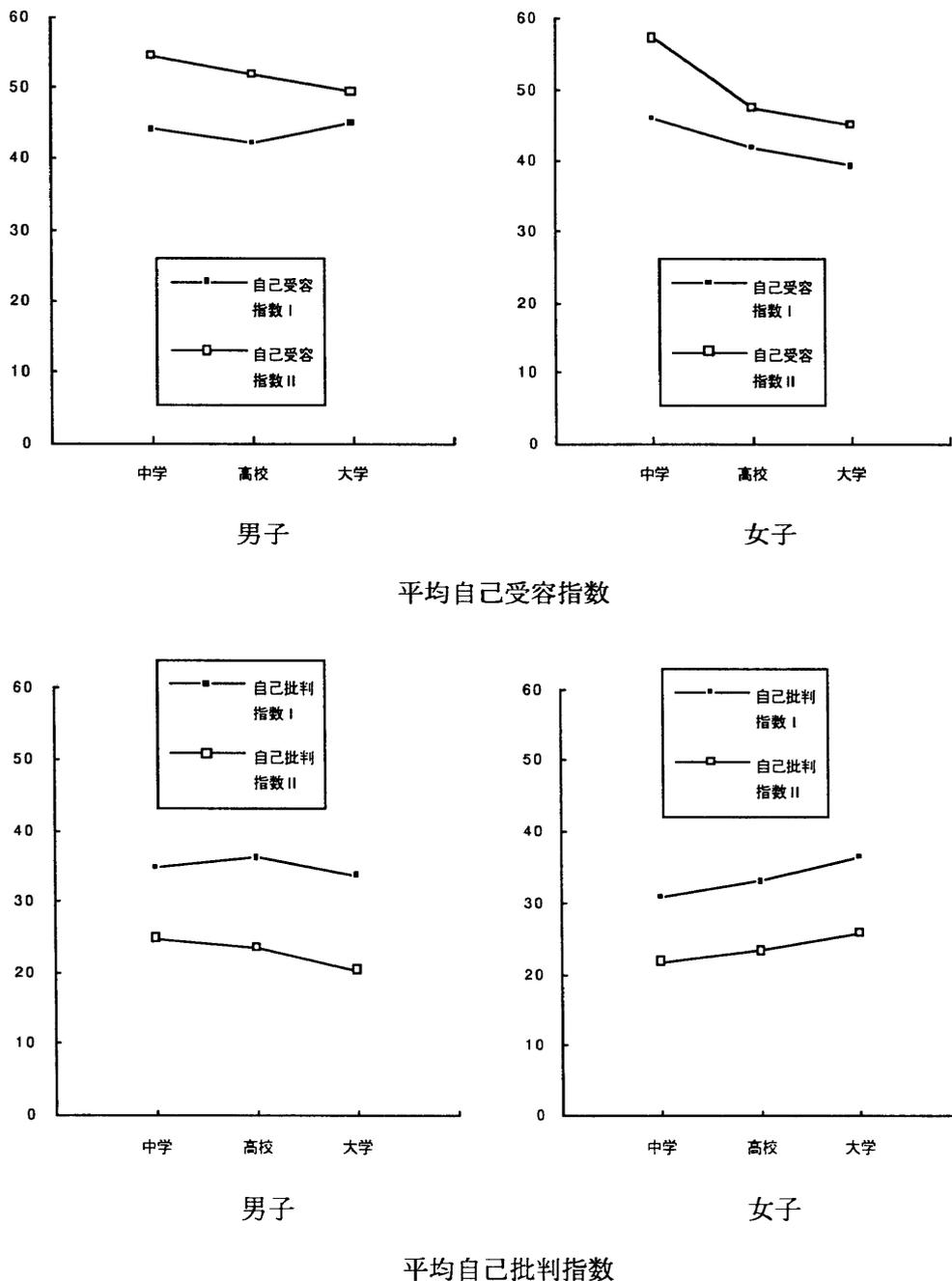


Fig. 5 加齢にともなう自己評価の変化 (加藤、1977、pp. 17-20)

年齢とともに自己評価のアップダウンをみただけでは、青年期の自己が安定しているか否かをみることはできても、なぜ自己評価が下がったり上がったりするのかといった解釈をすることは難しい。中学1年生から高校2年生まで各学年ごとに調査をおこなった根岸・岸(1993)のように、中学3年生でのみ自己評価が下がっていれば、それを高校受験の要因などに帰することはできるかもしれない。しかし、長い青年期を通してみる場合にはそう単純にはいかない。

多くの場合、この類の研究に対する批判点は横断研究であることに帰され、縦断研究をおこなうことがその解決策とされてきた。この批判はおそらく正しい。しかし、縦断研究をおこなえば問題が解決されるというほど事は単純ではない。なぜなら、横断研究であれ縦断研究であれ、自己評価のアップダウンを、自己評価を規定している質的意味あいとともにみていかなければ、何も青年を理解することができないからである。

### 自己概念研究

青年の質的意味あいをみていくアプローチは、自己概念研究としてなされてきた。

自己概念研究は、主に、「あなたは誰ですか」「私は誰ですか」といった内在的視点による測定法(Bugental & Zelen, 1950; Kuhn & McPartland, 1954)を用いてなされてきた。方法論が微妙に異なることはあっても、一貫して、自己に関する特性的描写が加齢とともに多くなることを見出してきた(Montemayor & Eisen, 1977; Noppe, 1983; 菊池, 1970; 遠藤, 1981; 藤井, 1984; 山田, 1981; 1989)。そして、そのことをもって、青年が自分(自己)に関心をもちはじめるとしたのである。

このことは、青年期頃からあらわれはじめる形式的操作の思考により、具体的な自己概念(例えば「私は3年2組」「〇〇小学校に通っている」「男だ」など)のみならず、抽象的な自己概念(例えば「明るい」「おっちょこちょいだ」など)も表現できるようになったことから解釈されたものである。測定における自己概念研究とは、自我の有している自己概念を無理矢理対象化させて表出させるものであるから、「私は誰ですか」と同じように尋ねても、対象化できる操作能力が十分に備わっていなければ、「身体的特徴(太っている・やせている・背が高い)」や「所有物(犬を飼っている)」「所属・住所(京都に住んでいます・〇〇小学校の2年生です)」などの外見的・表面的・具体的カテゴリーの記述が表現の中心となる(cf. Montemayor & Eisen, 1977)。よって、自己への抽象的な特性描写ができるようになることは、青年が、自己に関心をもちはじめたこととして受けとめられるのである。

しかし、これらの研究は、青年の質をみていくための自己概念研究としては、十分と言えるものではない。というのも、これまでの自己概念研究は、自己評価との関係をほとんど考慮することなくなされてきたからである。自己評価との関係を考慮しないで自己概念を扱うことは、自己概念における個人にとっての重要性を考慮しないということである。われわれは、青年の自己概念そのものが知りたいわけではなく、青年の自我が否定的になっていることと関連するものとして、自己概念が知りたいわけである。

20答法などの内在的視点による方法は、自己評価を規定している個人にとっての重要な自己概念を表出させる可能性がかなり高い(小山田, 1971; 溝上, 1995a, 1998)。McGuireらの一連の研究でも述べられているように、自ら表出される自己概念(McGuireらの言葉でいうと“spontaneous self-concept”)は、現在の動機や価値、様々な経験のなかでも比較的強度なものとの関わりをもっている(McGuire & Padawer-Singer, 1976; McGuire, McGuire, Child & Fujioka, 1978; McGuire & McGuire, 1980)。

しかし自己評価は、意識化されにくい漠然と感じられる自己概念や価値、あるいは全く意識化されない自己概念や価値をも含めてなされる特徴をもっている。自ら表出する意識化された自己概念は、確かに個人にとっての重要な自己概念であることが多い。しかし、意識化されない自己概念も含めて「個人にとって重要な領域」を扱っていかなければ、いくら可能性が高いからといっても十分ではないだろう(Fig. 6参照)。

また、自己概念の測定技法には、内在的視点による方法以外にも、「評定法」(長島・藤原・原野・斎藤・堀, 1966; 1967; 鈴木, 1974; Engel & Raine, 1963)のような外在的視点による方法もある。しかし外在的視点による方法は、調査者が予め用意した項目のあてはまりをもって、統一的に個人を理解する方法であるから、個性記述的観点を考慮できないという欠点をもっている。個性記述的観点を考慮しなかったことが、ズレ得点とself-esteemとの相関に一貫した結果を与えなかったことは既に述べた通りである。結局、項目を与える外在的視点による方法では、個人にとっ

て重要な自己概念を捉えていないとみなす方が妥当である。

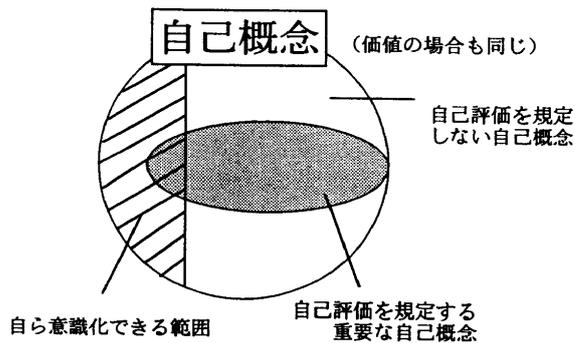


Fig. 6 自己評価を規定する重要な自己概念と自ら意識化できる範囲

(注1) 意識化できる自己概念には、重要なものあれば、重要でないものもある。

(注2) 20答法などの内在的視点による方法で測定しているのは、斜線の部分である。

### 青年を理解するための方法論

青年を研究していくにあたって、われわれが知りたいことは2つある。一つは、青年の自我が否定的になっているかどうかということ。もう一つは、その自己評価を規定する質的な意味あいは何であるのかということである。質的な意味あいは、上述のような自己概念のみならず、内在化された価値も含まれる。

前者については、自己評価が測定の指標となる。前章で述べたように、自己評価は、個人にとっての重要な領域を考慮するため、「全体的自己 (global self)」(cf. James, 1890 ; Burns, 1979 ; Rosenberg, 1965) に対しての評価とならなければならない。

また後者については、単に自己概念や価値を尋ねればよいというものではないことが、測定を難しくさせている。ここで知りたいのは、「自己評価を規定する」という条件つきでの、自己概念及び価値なのである。

先にも述べたように、内在的視点による自己概念や価値は、自ら表出するという意味で、自己評価に影響を及ぼす可能性を高くもっている。しかし自己評価は、意識化されにくい漠然と感じられる自己概念や価値、あるいは全く意識化されない自己概念や価値をも含めてなされる特徴をもっている。よってわれわれは、見出されない、あるいは像として意識化されない自己概念や価値をも考慮しながら、自己評価の質的意味を考えていかなければならない。

そこで、意識化されない自己概念や価値をも含めて、自己評価を規定する質的意味を考えていくには、自己評価の性質を利用すればいい。すなわち、「全体的自己」への評価は、自我のあり方を規定している多くの自己概念や価値の中から、自我のあり方を評価する「重要な自己概念」「重要な価値」のみを集約する性質をもっている。よって、自己評価を規定する自己概念や価値を知るためには、自己評価のセカンド・ステップとして、それに関わる自己概念や価値を尋ねていくのである。

その具体的技法としては、筆者らの開発した「WHY答法 (Why is it test)」(溝上、1994 ; 1995a ; 1995b) を挙げることができる。WHY答法は、「それはなぜですか」という刺激語を通して対象化をはかり、自ら意識化できる自己概念や価値を、「自己評価を規定する」という限定つきで知ることのできる技法である。

しかし、自己評価を規定する重要な自己概念や価値には、個人が意識化できないものも含まれている。よってその場合には、「外在的視点による方法」を巧みに用いて、自己評価を規定している重要な自己概念や価値を調べなければならない(溝上、1998)。外在的視点による方法とは、個人が対象化して意識化できない自己概念・価値までを含めて扱う方法である。その方法は、あらかじめ項目として概念化されたものを与えて対象化をはからせ、照らし合わせることで個人の自己概念や価値を探るものである。

このように、青年を「自我-自己」の観点からみていくとき、自己評価は、青年の自我の状態が否定的か否かをみる指標となると同時に、無数に存在する自己概念や価値の中から、自己評価を規定する重要な自己概念や価値のみを集約する機能をも担う。自己評価を規定する重要な自己概念や価値を見出すことができれば、青年の否定的自我のあり方を、水平軸、垂直軸の領域を考慮しながらみていくことができる。

青年心理学の研究は、自己評価をベースとしながら、それを規定している自己概念、価値を同時に用いてなされて

いかねばならない。

#### 第4節 自己評価と社会適応をつなぐ対象化の役割

##### 自我の対象化

まず、対象化が生じるメカニズムについて説明したい。

対象化とは、これまで何度も述べてきたように、主体としての自我を客体として意識化をはかろうとする過程のことである。しかし、自我を客体として対象化をはかると言っても、われわれの日常生活で自我を対象化する契機というのはそう多くない。つまり、「さあ、自分について考えてみよう」と自発的になされる場合は、非常に稀なのである。

対象化は、自分について考えなければこれから先へは進めない、考えざるを得ない、そういう何らかの「刺激」を受けてなされるものである。ここでいう刺激とは、「違和感」とも表現されるものである。

青年期で、対象化が生じる契機となる刺激は、自我の否定的な状態である。自我が否定的になれば、否定的になっている自我のあり方についていろいろと考えるものである。逆に、自我のあり方が順調な場合には、自我のあり方を対象化することはあまりない。

このように考えると、対象化は、「におい」のようなものだとも言える。何かあればにおい、におうことを意識するが、何も無いときにはにおわないし、におわないことを意識さえない。

しかし、自我の一部が否定的になることが対象化を必ずしも生起させるとは限らない。自我の一部が社会行動に影響を及ぼすほど深刻なものでなければ、対象化して考え込むことはなく、否定性を抱えたまま日々を過ごすこともある。日々の楽しさに埋没してそのまま日々が過ぎることもある。不安や葛藤がつのれば誰もが自我を対象化し、悶々と考える訳ではない。

##### 社会適応に直結しない自己スコア

これまでの青年心理学研究において、青年の否定的自己評価は青年期特有の不適応として考察されることが多かった。例えば、神経症やアパシーの学生のような閉じこもりなどのイメージである。事実第2節で述べたように、青年の自我の否定性は、現象的には神経症など病的なものと同様性が高かった。青年は、その否定的自己評価ゆえに社会の場にも不適応を示し、社会生活を十分に営めていないものと描かれてきたのである。

しかし、否定的自己評価が上記のような社会的不適応として顕現化することはあっても、すべての者がそうではない。われわれは、自己が否定的であっても、社会的には立派に適応している青年を、少なからずみることができる。上田の言葉を引用してみよう。

世間では一般に、健康で理想的な人間のことを「適応した人間」とか「人格適応」という用語で述べられることが多い。だが、この適応が単なる現存社会に対するものであれば、問題であるといわなければならない。……健康で自己実現をとげつつある人間は、どんな社会にも適応し得る能力を備えており、健康な人間は適応人間といえることができるかもしれないが、「逆もまた真なり」というわけで、適応人間はすべて（精神的に）健康な人間であると断定することは誤りをおかすことになる。 (カッコは筆者らが補足) (上田、1976、pp. 17-18)

上田が述べるように、精神的に健康である者は社会にも適応しているであろうが、社会に適応している人間の中には、社会遊泳術には巧みであるが、一貫した信念も節操もちあわせていない他人志向型の病理的人間も含まれる (上田、1976)。つまり、社会に適応している者の中には精神的に健康でない、つまり自己が否定的に覆われている者もみられるのである。同様の見解は、梶田によっても、「内的自己・現象的世界 vs 外的に提示される自己」との関係として論じられている (梶田、1991)。

筆者らは、以前おこなったインタビュー調査で、自己評価のスコアが低かった割に楽しく生きている青年たちにその胸の内を尋ねた。青年たちが、次のように答えたことが印象的であった。

確かに尋ねられれば、自分が人と違って何かができるわけではないし、これでいいのかと言われればいいとは言えない。でもそんなことに悩んでも道が切り開けるわけではないし、とにかくこうして毎日できることをやっていくしかない。それで楽しく毎日が過ごせればそれでいいとも思っている。

自分がどうだと言える人っていうのはそんなにいない。まあ、楽しければいいと思っている。

このように、青年の自己評価の低さから、短絡的に、反社会的行動や神経症、アパシーなどを連想してはならない。改めて自己について問い直してみても否定的になってしまうにしても、日常生活のなかで常に自我を対象化して悩み葛藤しているわけでは必ずしもないのである。「尋ねたがゆえに」(調査者が促し手となって対象化させたがゆえに)低い自己評価が提示されたとしてもいうべきもので、何かを契機に意識化して悩むことはあるだろうが、日常生活は楽しく明るく過ごしているのである。

このことは、社会生活を営む上で、否定的な自分を対象化して悩まないに進めないほどのものなのか、それともひとまずは横に置いて何とか社会生活を営んでいける程度のものなのか、という違いからくるものである。自我の一部が社会行動に影響を及ぼすほど深刻なものでなければ、対象化して考え込むことはなく、否定性を抱えたまま日々を過ごすこともあるのである。

#### 文化心理学が提唱する社会適応に関する自我のあり方

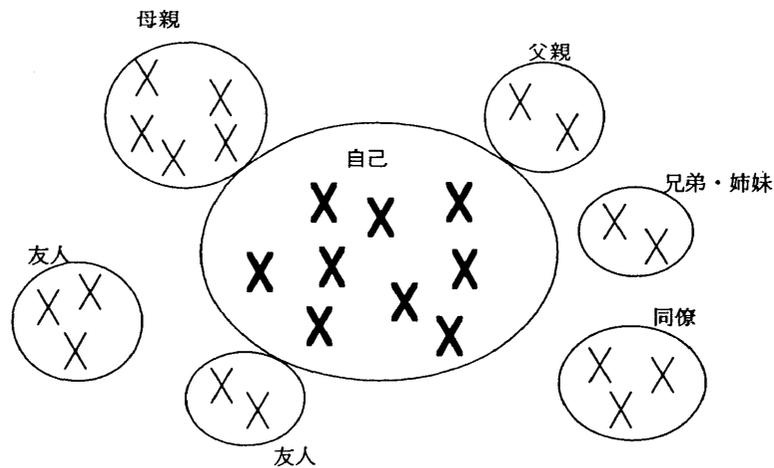
社会適応に関する自我のあり方については、文化心理学の打ちだした見解と共通するところでもある。

従来文化比較の研究からは、日本人の自己評価スコアが欧米人に比べてかなり低いことが指摘されていた(佐藤、1986; 北村・Stevenson・木村・加藤・武田、1991)。遠藤(1995)によれば、自己の指標は従来精神的健康や適応の指標になると考えられてきたが(例えば、Bills, Vance & McLean, 1951; Hanlon, Hofstaetter & O'Conner, 1954; Chodorkoff, 1954; Block & Thomas, 1955; 鈴木、1978)、その前提でこれを解釈すると、日本人の精神状態が健康であるかが疑わしいということになる。日本人の精神的健康度は、欧米に比べて劣っているのだろうか。

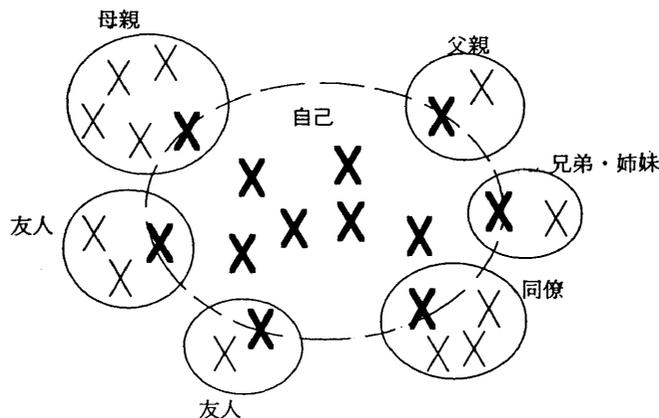
この問いに答えた代表的研究が、Markus & 北山の、社会適応に関する自我のあり方が日本人と欧米人とでは異なるという一連の報告であった(Markus & Kitayama, 1991a; 1991b; 1994a; 1994b; 北山、1994; 北山・唐澤、1995; 1996; 北山・高木・松本、1995)。北山(1994)は、それぞれが身を置いている文化に適応しつつ生きていくためには、要されてくる自我のあり方がそもそも異なってくることを強調し、自我<sup>self</sup>・関係性という2軸を用いて、欧米タイプを「相互独立的自己観 (independent construal of self)」、日本タイプを「相互協動的自己観 (interdependent construal of self)」と2つのプロトタイプとして示し(Fig. 7参照)、それぞれを次のように説明した。

欧米人の自我は、他から切り離されたものという前提のもと活動している(=相互独立的自己観)。この自我のあり方は、その文化の様々な習慣(例えば、個人の好みとそれにもとづく選択の重視)、風習(例えば、自主性を重んじる子育て)、そして社会的システム(例えば、メリットペイ・システム)等から派生するライフタスクに反映されている。このような文化に適応し、一人前の「人」となり、そのようなものとして認められるための必要条件は、自分自身の中に誇るべき属性(例えば、才能や性格、能力)を見出し、それを外に表現していくことによって自己実現をはかり、それらの属性の存在を自分自身で確認することである。人間関係は重要であるが、それは自我が関係性から独立していることが確立されたうえで、個人的に選択できるオプションにすぎない。

それに対して日本人の自我は、他と根源的に結びついているという前提のもと活動している(=相互協動的自己観)。この自我のあり方は、その文化の様々な習慣(例えば、他人に気をつかい「もてなす」ことの重視)、風習(迷惑をかけないことを重んじる子育て)、そして社会システム(例えば、年功序列制)等から派生するライフタスクに反映している。このような文化に適応し、「人」となり、そのようなものとして認められるための必要条件は、意味ある社会的関係に所属し、その中で相応の位置をしめることである。そして、他者と相互依存的・協動的な関係を持続することにより、自我の社会的存在を確認し、そうすることによって自己実現をはかることである。自我が、関係性から独立することも重要であるが、これは他との相互共存を満たした上で個人的に選択できるオプションにすぎない(北山、1994)。



A.相互独立的自己観 (independent construal of self)



B.相互協調的自己観 (interdependent construal of self)

Fig. 7 文化的自己観のプロトタイプ  
(注) 北山 (1994) p. 155より抜粋

日本人の自我のあり方を考えると、日本人が日本社会で生きていく上で重要なのは、欧米人のように自己を基準として内なる属性を見出し表現していくことよりも、意味ある社会的なポジションや関係性をつくりあげていくことである。よって、日本社会でうまく生きている者のなかには、個人としての自我のあり方よりも、関係性をいかに円滑に遂行するかということに重要視している者がある。上田 (1976) が述べたように、自分を殺して生きている者もある。自分を殺さないまでも、「本当はこうしたいんだが」といった不満や悩みを少なからず抱いて生きている者もある。

しかし、それらの者にとっての最重要事は、役割を含めた関係性のあり方にあるため、そのような他と切り離された個人として所有する悩みはさほど対象化せずともやっていける<sup>89</sup>。このような者に自己評価をさせると、そのスコアは確かに低いだろうが、行動レベルでは社会に十分適応しているのである。

## 第5節 自己評価と青年

### 高い自己評価は何を意味するのか？

青年の自己評価が低いことのみならず、自己評価が高いことも、青年心理学的には一つの関心事である。

従来の青年心理学は、自我のおかれる環境が変化することによって違和感を感じ、とにかく自我が否定的になりやすいことを強調してきた。そして、それを乗り越えることが「自我の再構築」として意義づけられ、乗り越えることによって青年期の否定性が終わりを告げるとされてきた。それゆえ、自己評価が高いときには、青年がまるでこの否

定性を乗り越えてきたかのようなイメージをもつことさえあったかと思われる。

ところが、Marcia (1966 ; 1967) の述べる「早期完了 (foreclosure)」群は、親や教師など重要な他者とのやりとりを通してつくりあげてきた児童期までの自我に疑問も感じず (=危機なし)、親や教師などのもっている価値をそのまま内在化 (傾倒あり) している青年であった (Marcia, 1966)。このような青年は、自我が否定性に陥ることなく、また否定から肯定へと乗り越えることなく自己評価を高くもつことができている。

先ほど、自己評価が否定的であっても日常的には楽しく明るく毎日を過ごしている、社会的にも適応している青年を紹介したが、同じく社会的に適応している者のなかには、社会的に適応していることそのものが自己評価の高さと同義になっている青年もいる。この青年も、対象化された自我に何らかの誇るべき側面を見出せるわけではなく、人生課題における何らかの選択や決定をおこなったわけでもないのだが、他者との関係性は良好であるし、それなりに毎日を楽しみ過ごしている。そして、そのような自我のあり方をよしとする青年である。

自我に誇るべき側面を見出せないのに自我が否定的にならない理由としては、やはり日本文化の適応における自我のあり方が挙げられる。Markus & 北山のいう相互協調的自己観の意味には、自我と他者との関係性の感覚が連続的であるということも含まれている。日本人は、何らかの「靱帯」(中根、1967)、あるいは「あいだ」(木村、1972 ; 1988) のなかで自らの存在意義を見出す。その「靱帯」や「あいだ」は、あたかも自分自身であるかのように感じられるほど大切なものである (浜口、1982)。それゆえに、他者との関係性がうまくいっているとき、社会的役割がしっかりと遂行されているときには、それそのものが自我の存在意義として確認されるのである<sup>30)</sup>。

このように、高い自己評価にもいくつかの意味があり、自己評価が高い者の中には、青年期の課題を見据え自我の存在意義をしっかりと見出している青年もいれば、Marcia のいう早期完了型の青年もいる。また、社会的な適応そのものが自己評価と同義になっている青年もいるのである。

#### 低くも高くもない自己評価を示す青年たち

青年へのアプローチは、自己評価をベースにしながらか、それを規定する自己概念や価値をみることだと述べた。しかし、自己評価の指標が単純な高低ではみていくことの難しい青年のタイプがいることを、下山 (1981) の研究例からうかがうことができる。そして、意外とこのタイプの青年は多くみられる。

(このタイプの青年は) 全体の約半分を占める。……本実験を通してこのような青年が多いこと理由として次のようなことが考えられた。まず第一に、「自分のことを考え、自分を創造していく必要が何もない」ということがあげられる。多くの親は、一般的であること以上は子供に求めないし、大学へは行きなさい、後は好きなようにやりなさい、という形で物わかりがいい。友人関係では、目立つよりは、目立たない方がうまくやっていた。社会に対しても、反抗する理由が何もないわけで、むしろ、社会に対して意見をもってない方が周囲から歓迎される。つまり、青年がそれにぶつかり、そこで自分を省るための外部から課せられた枠組 (壁) が無いわけである。また若者文化が大きな位置を占めており、青年が別に「自分」を創り、決定しなくても十分やっていた。その意味では、青年は、もはや境界人ではない。  
(下山、1981、pp. 114-115)

このタイプの青年は、言い換えれば、「悪くなければそれでいい」式で青年期を過ごしている。自己評価が高いかどうかはわからないが、否定的になっていないことは確かである。なぜなら、否定的になる理由がないからである。その代わりに、自分を支えるだけの誇りうる自我の側面をもっているわけでもない。よって、自己評価を尋ね、自己評価を規定している自己概念や価値を強いて表出させようとしても、表出されるものは本人以外の者にとっては訳の分からぬものとなる。時には本人自身でさえも、分からないものである。

このような青年をとらえていくためには、自己評価の尺度を単なる高低のものから、高低の意味を分けて扱えるものに改訂しなければならない。つまり、自己を肯定性次元と否定性次元とに分けて評価させるのである。この考え方は、自己評価に関する研究史のなかでは比較的新しい考え方であるが (おそらくはじめての提唱は、1992年の遠藤の論考である<sup>31)</sup>)、認知心理学や社会心理学では古くからいわれてきたものである。

Peeters (1971) によれば、否定性次元は肯定性次元よりも複雑な認知構造であり、肯定性はそのまま肯定性と呼

べるが、否定性はそのまま否定性になる場合もあれば、肯定性の欠けた状態 (absence of positivity)、肯定性の対極 (opposite of positivity) の場合と様々である。Peeters は肯定性次元から否定性次元の流れで考えているが、自己評価の尺度研究はどちらかといえば、否定性次元から肯定性次元の流れで考えてきたところがある。Peeters の見解を否定性次元から肯定性次元の流れでとらえなおしてみると、①否定性次元を否定することがそのまま肯定性次元になるタイプ、と②否定性次元は否定されるがそれが肯定性次元にはならないタイプ、の2つが考えられる。①のタイプは、従来から扱われてきた逆転項目を反転させる一次元スケールの考え方であり、心理学ではもっとも馴染みのある考え方である。②のタイプは特に近年盛んに成果があげられているが、それは“嫌いでなければそれでいい”といった自己受容観 (沢崎、1984) や、“こうなりたくない自分”といった「負の理想自己 (negative ideal self)」 (Ogilvie, 1987 ; 遠藤、1992b)、「可能自己 (possible self)」 (Markus & Nurius, 1986) の考え方にほぼ相当する。

筆者らは、このような考え方をもとに、自己評価尺度を肯定性次元と否定性次元とに分けて青年のタイプを検討しているが (溝上・尾崎、1996 ; 尾崎・溝上、1996 ; 水間・溝上、1996 ; 溝上、1998)、いまだ成果を報告できる段階ではない。考え方だけここに示しておいた次第である。

## 第6節 今後の課題

青年研究に関しては、今後なすべき課題がいくつもあるように感じる。本稿は、これからの青年心理学研究の方向性を一つ提示しただけなので、具体的な実践はまさしくこれからである。最後に、上記では述べられなかった、しかし青年をみていく際には是非とも考えていかねばならない問題を、今後の課題として2つつけ加えておきたい。

一つは、社会的には適応しながらも、将来の自分に対しては否定的であり、できることなら何とかしたいと思っている。しかし、現実には何も考えないで日々が過ぎていく。そういう青年がいるのはなぜだろうか、という問題である。このタイプの青年が適応をはかっているメカニズムは、第4節で述べたが、どうしてこのようなあり方が生じるのかといった説明はいまだなされていない。筆者らの考えるところを、若干述べておこうと思う。

青年期は一人前のおとなとしての債務から免除されたモラトリアム期間であり (Erikson, 1950/1963 ; 1959 ; 1968)、その期間に来たる人生を過ごしていくための種々の決定をしなければならない。青年期の課題としても、この時期に、職業選択や人生の価値を決定すること重要であると、多くの青年心理学者たちによって述べられてきた (cf. Havighurst, 1953 ; 桂、1977)。

しかし、自分の夢や目標、価値にそって職業や人生を選択できる者などそう多くはいない。実際には、「選択できるものなから」「できるだけ自分にあうものを」「選ばなければならない時期 (就職活動の時期など) に」、選んでいるように思われる。このような青年たちにとって、人生や将来の職業などを選択・決定するために一生懸命悩むことは、言い換えれば、それまで生きてきた人生を否定することにもなる。日々の生活を楽しく過ごそうとするのはむしろ当然なことなのかもしれない、垂直軸に関わる問題領域に取り組むよりも、今この一瞬をいかに楽しく、あるいは不快感なく過ごすか、といったことに考えが終始するのかもしれない。「先のことは考えてもどうしようもない」、そんな心境であろう。

この問題に取り組んでいくためには、心理学の範疇だけではもはや説明ができないように思われる。就職に関する学歴・教育の要因 (cf. Boudon, 1973 ; 藤田、1980) や教育と経済的平等・不平等の問題 (Thurow, 1977) などの社会的要因をもっと扱っていかねばならない。筆者らは考えている。

もう一つは、青年期の意義が理論上「自我の再構築」にあるとはいえ、これは実証的に扱っていけるものなのか、という問題である。

自我の再構築という言葉は直接用いていないが、この考え方をダイレクトに扱った実証的研究として、Marcia (1966 ; 1967) の「自我同一性地位 (identity status)」の研究を挙げることができる。この概念の測定方法は、それまでの人生に、意味のあるいくつかの可能性について迷い決定しようとするか否かの「危機」という基準と、自分自身の信念を明確に表現したり、それに基づいて行動することができているか否かの「傾倒」という基準の2つの基準を用いて、青年の自我同一性の問題への対処の仕方を4つに類型化する (同一性達成・モラトリアム・早期完了・同一性拡散)、というものである。言うまでもなく、Marcia は Erikson の自我同一性概念を出発点としており、ここでの危機という基準も、青年期が同一性の確立に向けて、児童期までに抱かれていた「連続性

(continuity)」「斉一性 (sameness)」の感覚が一度崩れるという危機説をベースとしている。

しかし、自我の再構築が、自我のあり方が変わったという程度の意味なのであれば、自我の再構築は青年期のみならず、児童期、成人期、壮年期と人生全般にわたってみられる現象である。そうではないだろうということを論じたのが、第3節であった。

Marcia の分類では、危機を感じたかどうかが分類基準となっているが、危機の感じ方は人によって千差万別である (村瀬、1995)。ある人にとっては危機であることも、ある人にとってはちょっとした否定性で片づいてしまうこともある。しかし、青年期の終わり頃には (いつが終わりという話はできないが)、やはり児童期の自我のあり方は変わっているとしか思えない自我のあり方に変貌している。つまり、青年期に人生の危機を経験したと感じなくとも、自我のあり方は児童期の自我そのままではないのである。本人に意識されなくとも、やはり自我は再構築されていると言えるのである。

このような考えは、青年期が「危機説」をベースとして理論構築される点に異論を唱えるものである。そして、実に多くの者が異論を唱えている (cf. Elkin & Westley, 1955; Friedenberg, 1959; Offer, 1969; Offer & Offer, 1975; Douvan & Adelson, 1966; Adelson & Doehrman, 1980; Coleman, 1978)。しかし、だからといって「平穩説」だというアンチテーゼも安易である。自我-自己の観点は、この両者の立場をともに認めながら、かつ自我の再構築に迫れないかと考えられるものである。しかし、ここから先は今後の課題である。

## 最後に

筆者らは青年心理学を専門としているが、どうしても青年心理学の中に位置づいているとは思えないままここまで来てしまった。何を研究すれば、青年心理学の研究なのか。青年を扱えば青年心理学ではないだろうから、答えは青年期の意義あたりにある。しかし、心理学の実証的研究は、この青年期の意義になかなか迫れていないように思われる。

最近、自我-自己論が自分なりにわかるようになってきて、青年へのアプローチが筆者らなりにではあるがみえるようになってきた。これまでどうしておもしろいと思えなかったのかは、意外と簡単であった。これまでの青年心理学研究が、青年が身をおく社会・歴史的環境をほとんど考慮していなかったからである。もちろん、これまでの研究が積み重なって今があるからこそ、こんなことがいえることは百も承知している。ただ方法論として、青年の身をおく社会・歴史的環境を重視するということが、単純に、フィールドワークやインタビューに走るということと受け取らないで頂きたい。方法論は、青年の概念が社会の産物であるところにヒントがある。

筆者らは、このようなスタンスで青年心理学に取り組んでいこうと新たに決意し、筆者らのスタンスですすめていくために、これまでの青年心理学研究を、膨大な数の著書と論文にあたりながら、自我-自己論の枠組みから読みかえてきた。しかし、文献を読みすすめるにつれ、多くの問題点や謬論に直面した。そこで本稿では、青年期における従来の理論をできるだけ忠実におさえつつも、場合によっては新しい視点を導入して論を展開し、考えられる問題点を呈示することとした。

とはいえ、できたと思えば誤解に気づき、ちょっと日にちをおくと別の誤解や勘違いに気づく。最終的には、筆者らの青年研究への取り組みも、まだまだ甘いようである。経験がまだ浅いが故であろうと思っている。本稿における論考も不十分であるが、今後研究を重ねていき研鑽を積んでいく姿勢だけ示してお許し願えればと思う。

## 注

1. The Study of Youth and Adolescent Psychology from the "Ego-Self": The Significance, Problems and Future Perspectives.
2. Shinichi MIZOKAMI (Center for Integrative Research on Didactic Systems in Higher Education, Kyoto University)
3. Reiko MIZUMA (Graduate School of Education, Kyoto University)

4. もちろん Mead (1961) や Benedict (1954 ; 1970) の述べるように、児童期と青年期は連続的で否定性をともなわず移行する場合もある。
5. ここでは日本の青年をイメージしつつ文献をまとめているので、文化や社会が異なれば、身体的成熟が青年の自我に影響を与えない場合もあることはつけ加えておく。Mead や Benedict を代表する文化人類学者が指摘しているように、生理的変化を社会がどう受けとめるかという文化的意義づけによって、身体的成熟が個人の自我に影響を与えるか否かは変わってくると考えられる (Mead, 1961 ; Benedict ; 1954 ; 1970, Landis, 1945 / 1952)。
6. 意識といえば普通 “consciousness” であるが、ここで “awareness (気づき)” としているのは、自我に対しての気づきが敏感になっている状態を強調したかったからであろうと察せられる。
7. 水平軸、垂直軸の問題を否定的「自我」の問題とし、「自己」の問題と表現しない理由は、自己がセカンダリーな立場にあるからである。つまり、自己という概念をもち出さなくとも、自我は経験を通じて否定的になるのであり、主体である自我は否定的になっている所以を知らずとも活動していく。自我が、自我を客体として否定的になっている所以を探索しはじめるとき、自己の概念は用いるに足る意義が生まれる。
8. Markus & 北山の一連の論文では、「自己 (self)」と表現されているが、ここでは本論の流れに沿う形で「自我」と表現した。
9. ただし、関係性がうまくいっていない場合は、対象化の機能は働き、自己評価も低くなりやすい。また、関係性に直接影響を及ぼすような要因が否定的である場合にも、対象化の機能は生じやすい。例えば、関係性そのものの取り方は問題ないのだが、太っていたり背が低かったりして、結果的に他者とのつき合い方が億劫になったりする場合である。
10. これを、文化でなく、現代人の特徴として捉える者もいる。例えば和田は、昔の人間は生きる上での価値基準を自分なりにしっかりもっていたと言う。しかし、現代の若者たちにはそれがみられず、彼らは周囲と同調することにおいて自らの存在意義を見出しているのだと言う (和田、1996)。ただし、この点においては慎重に検討する必要があり、注にとどめた次第である。
11. 自己評価の領域では遠藤が1992年に、自己を評価するとき、肯定性次元 (例えば「私は自分に自信がある」) に “はい” と答えることと、否定性次元 (例えば「私はだめな人間だ」) に “いいえ” と答えることが必ずしも等価ではないと指摘したのがおそらくはじめてであろう (遠藤、1992a)。

## 引用文献

- Achenbach, T. & Zigler, E. 1963 Social Competence and Self-Image Disparity in Psychiatric and Nonpsychiatric Patients. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 67, 197-205.
- Adelson, J. & Doehrman, M. J. 1980 The Psychodynamic Approach to Adolescence. In J. Adelson (Ed.) *Handbook of Adolescent Psychology*. New York: John Wiley & Sons. (pp. 99-116)
- Altrocchi, J., Parsons, O. A., & Dickoff, H. 1960 Changes in Self-Ideal Discrepancy in Repressors and Sensitizers. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 61, 67-72.
- 青木誠四郎 1948 改訂青年心理学 朝倉書店 (初版1938)
- Bachman, J. G. & O'Malley, P. M. 1977 Self-Esteem in Young Men: A Longitudinal Analysis of the Impact of Educational and Occupational Attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 365-380.
- Benedict, R. 1954 Continuities and Discontinuities in Cultural Conditioning. In W. E. Martin, & C. B. Stendler (Eds.), *Readings in Child Development*. New York: Harcourt, Brace and Company. (pp. 142-148)
- Benedict, R. 1970 *Patterns of Culture*. Boston: Houghton Mifflin. (米山俊直訳『文化の型』社会思想社、1973)
- Bills, R. E., Vance, E. L., & McLean, O. S. 1951 An Index of Adjustment and Values. *Journal of Consulting Psychology*, 15, 257-261.

- Block, J. & Thomas, H. 1955 Is Satisfaction with Self a Measure of Adjustment? *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 51, 254-259.
- Blos, P. 1962 *On Adolescence: A Psychoanalytic Interpretation*. The Free Press of Glencoe, Inc. (野沢栄司訳『青年期の精神医学』誠信書房、1971)
- Boudon, R. 1973 *L'Inégalité des Chances: La Mobilité Sociale dans les Sociétés Industrielles*. Librairie Armand Colin, Press. (杉本一郎・山本剛郎・草壁八郎訳『機会の不平等～産業社会における教育と社会移動』新曜社、1983)
- Bugental, J. F. T. & Zelen, S. L. 1950 Investigations into the 'Self-Concept' I: The W-A-Y Technique. *Journal of Personality*, 18, 483-498.
- Bühler, C. 1967 *Das Seelenleben des Jugendlichen: Versuch einer Analyse und Theorie der Psychischen Pubertät*. Stuttgart-Hohenheim: Gustav Fischer Verlag. (original work published 1921) (原田茂訳『青年の精神生活』協同出版、1969)
- Burns, R. B. 1979 *The Self Concept: In Theory, Measurement, Development and Behaviour*. London: Longman.
- Chodorkoff, B. 1954 Self-Perception, Perceptual Defense, and Adjustment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 508-512.
- Coleman, J. C. 1978 Current Contradictions in Adolescence Theory. *Journal of Youth and Adolescence*, 7, 1-12.
- Demo, D. H. & Savin-Williams, R. C. 1983 Early Adolescent Self-Esteem as Function of Social Class: Rosenberg and Pearlin Revised. *American Journal of Sociology*, 88, 763-774.
- Douvan, E. & Adelson, J. 1966 *The Adolescent Experience*. New York: John Wiley & Sons.
- Elkin, F. & Westley, W. A. 1955 The Myth of Adolescent Culture. *American Sociological Review*, 20, 680-684.
- Elkind, D. 1967 Egocentrism in Adolescence. *Child Development*, 38, 1025-1034.
- Elkind, D. 1970 *Children and Adolescents: Interpretive Essays on Jean Piaget*. New York: Oxford University Press.
- Elkind, D. & Bowen, R. 1979 Imaginary Audience Behavior in Children and Adolescents. *Developmental Psychology*, 15, 38-44.
- 遠藤毅 1981 自己概念に関する研究 日本教育心理学会第23回総会発表論文集、420-421.
- 遠藤由美 1992a 個性化された評価基準からの自尊感情再考 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千壽編『セルフ・エスティームの心理学～自己価値の探求』ナカニシヤ出版 (pp. 57-70)
- 遠藤由美 1992b 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究、63、214-217.
- 遠藤由美 1995 精神的健康の指標としての自己をめぐる議論 社会心理学研究、11、134-144.
- Engel, M. & Raine, W. J. 1963 A Method for the Measurement of the Self-concept of Children in the Third Grade. *The Journal of Genetic Psychology*, 102, 85-106.
- Erikson, E. H. 1959 *Psychological Issues: Identity and the Life Cycle*. International Universities Press. (小此木啓吾訳編『自我同一性～アイデンティティとライフサイクル』誠信書房、1973)
- Erikson, E. H. 1963 *Childhood and Society*. (2nd Ed.) New York: W. W. Norton. (original work published 1950) (仁科弥生訳『幼児期と社会 I・II』みすず書房、1977/1980)
- Erikson, E. H. 1968 *Identity: Youth and Crisis*. New York: W. W. Norton. (岩瀬庸理訳『主体性～青年と危機』北望社、1969)
- Freud, A. 1966 *The Ego and the Mechanisms of Defense*. London: International Universities Press (original work published 1936) (黒丸正四郎・中野良平『アンナ・フロイト著作集 2: 自我と防衛機制』岩崎学術出版社、1982)

- Friedenberg, E. Z. 1959 *The Vanishing Adolescent*. Boston: Beacon Press.
- 藤井虔 1984 青年期の自己概念についての認知発達の研究 京都府立大学学術報告(人文)、36、169-187.
- 藤田英典 1980 進路選択のメカニズム 山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択～高学歴時代の自立の条件』有斐閣選書(pp. 105-129)
- Hall, G. S. 1969 *Adolescence: Its Psychology and Its Relations to Physiology, Anthropology, Sociology, Sex, Crime, Religion and Education*. Vol. I-II. New York: Arno Press & The New York Times. (original work published 1904)
- 浜口恵俊 1982 間人主義の社会日本 東洋経済新報社
- Hanlon, T. E., Hofstauetter, P. R., & O'Conner, J. P. 1954 Congruence of Self and Ideal Self in Relation to Personality Adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, 18, 215-218.
- Harter, S. 1983 Developmental Perspectives on the Self-System. In P. H. Mussen (Ed.), *Handbook of Child Psychology, Volume 4: Socialization, Personality, and Social Development*. John Wiley & Sons. (pp. 275-385)
- Harter, S. 1990 Process underlying Adolescent Self-Concept Formation. In R. Montemayor, G. R. Adams & T. P. Gullotta (Eds.), *From Childhood to Adolescence: A Transition Period?* Newbury Park: SAGE. (pp. 205-239)
- Havighurst, R. J. 1953 *Human Development and Education*. New York: Longmans. (荘司雅子監訳『人間の発達課題と教育』玉川大学出版部、1995)
- Hess, A. L. & Bradshaw, H. L. 1970 Positiveness of Self-Concept and Ideal Self as a Function of Age. *The Journal of Genetic Psychology*, 117, 57-67.
- 平石賢二 1988 青年期における健康な自己意識の発達 日本教育心理学会第30回総会発表論文集、502-503.
- 平石賢二 1990 青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅰ)～自己肯定性次元と自己安定性次元の検討 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)、37、217-234.
- 平石賢二 1993 青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅱ)～重要な他者からの評価との関連 名古屋大学教育学部(教育心理学科)、40、99-125.
- Hollingworth, L. S. 1928 *The Psychology of the Adolescent*. New York: D. Appleton and Company.
- 堀尾治代 1981 自己概念の測定と評価 中西信男・鎌幹八郎編『心理学10:自我・自己』有斐閣双書(pp. 197-211)
- 伊藤美奈子 1991 自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達の变化～2次元から見た自己受容発達プロセス 発達心理学研究、2、70-77.
- 伊藤美奈子 1992 自己受容と性格特性との関連についての一考察 心理学研究、63、205-208.
- James, W. 1890 *The Principles of Psychology*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学(第2版) 東京大学出版会(初版1980)
- 梶田叡一 1991 内面性の心理学 大日本図書
- 加藤隆勝 1962 青年期における自己受容と自己批判の年令的変容について 岐阜大学学芸学部研究報告(人文科学)、11、83-89.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造 心理学モノグラフ No. 14(日本心理学会)
- 加藤隆勝 1987 青年期の意識構造 誠信書房
- 桂広介 1977 人生の過渡期としての青年期 桂広介編『青年期～意識と行動』金子書房(pp. 5-16)
- Katz, P. & Zigler, E. 1967 Self-Image Disparity: A Developmental Approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 5, 186-195.
- 菊池登紀子 1970 青年期における自己観 [I]～私立女子校生における発達の様相 岩手大学教育学部研究年報、30、57-76.
- 木村敏 1972 人と人との間～精神病理学的日本論 弘文堂

- 木村敏 1988 あいだ 弘文堂
- 北村晴朗・H. W. Stevenson・木村進・加藤忠久・武田悦夫 1991 児童の成績・能力についての自己評価と父母の評定に関する日米比較 応用心理学研究、16、19-31.
- 北山忍 1994 文化的自己観と心理的プロセス 社会心理学研究、10、153-167.
- 北山忍・唐澤真弓 1995 自己：文化心理学的視座 実験社会心理学研究、35、133-163.
- 北山忍・唐澤真弓 1996 感情の文化心理学 児童心理学の進歩 Vol. 35 金子書房 (pp. 271-301)
- 北山忍・高木浩人・松本寿弥 1995 成功と失敗の帰因：日本の自己の文化心理学 心理学評論、38、247-280.
- Kuhn, M. H. & McPartland, T. S. 1954 An Empirical Investigation of Self-Attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
- Landis, P. H. 1952 *Adolescence and Youth: The Process of Maturing.* (2nd Ed.). New York: McGraw-Hill. (original work published 1945)
- Lewin, K. 1951 *Field Theory in Social Science.* Harper & Brothers. (猪股左登留訳『社会科学における場の理論』誠信書房、1956)
- Lombardo, J. P., Fantasia, S. C., & Solheim, G. 1975 The Relationship of Internality-Externality, Self-Acceptance, and Self-Ideal Discrepancies. *The Journal of Genetic Psychology*, 126, 281-288.
- Marcia, J. E. 1966 Development and Validation of Ego-Identity Status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Marcia, J. E. 1967 Ego Identity Status: Relationship to Change in Self-Esteem, "General Maladjustment," and Authoritarianism. *Journal of Personality*, 35, 118-133.
- Markus, H. 1977 Self-Schemata and Processing Information About the Self. *Journal of Personality and Social Psychology*, 35, 63-78.
- Markus, H. 1983 Self-Knowledge: An Expanded View. *Journal of Personality*, 51, 543-565.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. 1991a Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion and Motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. 1991b Cultural Variation in the Self-concept. In J. Strauss & G. R. Goethals (Eds.), *The Self: Interdisciplinary Approaches.* New York: Springer-Verlag. (pp. 18-48)
- Markus, H. R. & Kitayama, S. 1994a A Collective Fear of the Collective: Implications for Selves and Theories of Selves. *Personality and Social Psychological Bulletin*, 20, 568-579.
- Markus, H. R. & Kitayama, S. 1994b The Cultural Construction of Self and Emotion: Implications for Social Behavior. In S. Kitayama & H. R. Markus (Eds.), *Emotion and Culture: Empirical Studies of Mutual Influence.* Washington, D. C.: American Psychological Association. (pp. 89-130)
- Markus, H. & Nurius, P. 1986 Possible Selves. *American Psychologist*, 41, 954-969.
- Markus, H. & Smith, J. 1981 The Influence of Self-Schemata on the Perception of Others. In N. Cantor & J. F. Kihlstrom (Eds.), *Personality, Cognition, and Social Interaction.* Hillsdale, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (pp. 233-262)
- McCarthy, J. D. & Hoge, D. R. 1982 Analysis of Age Effects in Longitudinal Studies of Adolescent Self-Esteem. *Developmental Psychology*, 18, 372-379.
- McGuire, W. J. & McGuire, C. V. 1980 Salience of Handedness in the Spontaneous Self-concept. *Perceptual and Motor Skills*, 50, 3-7.
- McGuire, W. J., McGuire, C. V., Child, P., & Fujioka, T. 1978 Salience of Ethnicity in the Spontaneous Self-Concept as a Function of One's Ethnic Distinctiveness in the Social Environment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 36, 511-520.
- McGuire, W. J. & Padawer-Singer, A. 1976 Trait Salience in the Spontaneous Self-Concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 743-754.

- Mead, M. 1961 *Coming of Age in Samoa*. New York: William Morrow. (畑中幸子・山本真鳥共訳『サモアの思春期』蒼樹書房、1976)
- Miller, K. S. & Worchel, P. 1956 *The Effects of Need-Achievement and Self-Ideal Discrepancy on Performance under Stress*. *Journal of Personality*, 25, 176-190.
- 宮沢秀次 1979 青年期における自己受容性の一研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)、25、105-117.
- 宮脇恭子 1984 思春期女子における自我体験の様相 日本教育心理学会第26回総会発表論文集、418-419.
- 溝上慎一 1994 Spontaneous Self の理論的検討およびWHY答法の開発 日本教育心理学会第36回総会発表論文集、p. 203.
- 溝上慎一 1995a WHY答法についての理論的考察 大阪大学教育心理学年報、4、61-72.
- 溝上慎一 1995b WHY答法による将来の生き方基底因 心理学研究、66、367-372.
- 溝上慎一 1997 自己評価の規定要因とSELF-ESTEEMとの関係～個性記述的観点を考慮する方法としての外在的視点・内在的視点の関係 教育心理学研究、45、62-70.
- 溝上慎一 1998 「自己」の基礎理論～心理学の実証的パラダイムを検証する 金子書房(印刷中)
- 溝上慎一・尾崎仁美 1996 自己評価における次元の検討Ⅰ 日本心理学会第60回大会発表論文集、p. 53.
- 水間玲子・溝上慎一 1996 自己評価における次元の検討Ⅲ～Rosenberg scale再考 日本発達心理学会第8回大会発表論文集、p. 64.
- 望月衛 1951 青年心理学～青年の社会行動をどう理解するか 光文社
- 森下正康 1970 自己の理想像－現実像の差異と要求水準に関する研究 和歌山大学教育学部紀要(教育科学)、20、97-106.
- Montemayor, R. & Eisen, M. 1977 *The Development of Self-Conceptions from Childhood to Adolescence*. *Developmental Psychology*, 13, 314-319.
- 村瀬孝雄 1995 自己の臨床心理学2：アイデンティティ論考～青年期における自己確立を中心に 誠信書房
- 中根千枝 1967 タテ社会の人間関係～単一社会の理論 講談社現代新書
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1966 自我と適応の関係についての研究(1)～Self-Differential作製の試み 東京教育大学教育学部紀要、12、85-106.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀洋道 1967 自我と適応の関係についての研究(2)～Self-Differentialの作製 東京教育大学教育学部紀要、13、59-83.
- 根岸円・岸俊彦 1993 肯定的自己概念の養成2. 中・高校生に対する調査 日本教育心理学会第35回総会発表論文集、p. 215.
- 野辺地正之 1972 現代青年における発達の特徴と教育 依田新・大西誠一郎・斎藤耕二・津留宏・西平直喜・藤原喜悦・宮川知彰編『現代青年心理学講座7：現代青年の生きがい』金子書房(pp. 3-54)
- 野上俊夫 1959 青年の心理と教育(訂正版) 同文書院(初版1954)
- Noppe, I. C. 1983 *A Cognitive-Developmental Perspective on the Adolescent Self-Concept*. *Journal of Early Adolescence*, 3, 275-286.
- Offer, D. 1969 *The Psychological World of the Teen-ager: A Study of Normal Adolescent Boys*. New York: Basic Books.
- Offer, D. & Offer, J. B. 1975 *From Teenage to Young Manhood: A Psychological Study*. New York: Basic Books.
- Ogilvie, D. M. 1987 *The Undesired Self: A Neglected Variables in Personality Research*. *Journal of Personality and Social Psychology*, 52, 379-385.
- 岡本重雄 1947 若き日の自我像～青年心理の研究 羽田書店
- 小山田隆明 1971 セルフ・イメージの発達的研究(序報) 岐阜大学教育学部研究報告(人文科学)、20、88-96.
- 尾崎仁美・溝上慎一 1996 自己評価における次元の検討Ⅱ 日本心理学会第60回大会発表論文集、p. 54.
- Peeters, G. 1971 *The Positive-Negative Asymmetry: On Cognitive Consistency and Positivity Bias*. *Europe-*

- an *Journal of Social Psychology*, 1, 455-474.
- Phillips, L. & Zigler, E. 1961 Social Competence: The Action-Thought Parameter and Vicariousness in Normal and Pathological Behaviors. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 63, 137-146.
- Piaget, J. 1972 *Problèmes de Psychologie Génétique*. Denoël-Gonthier. (芳賀純訳『発生的心理学～子どもの発達の条件』誠信書房、1975)
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press.
- Rosenberg, M. 1979 *Conceiving the Self*. New York: Basic Books, Inc., Publishers.
- Rousseau, J. J. 1762 *Émile ou de L'Éducation*. (今野一雄訳『エミール(上・中・下)』岩波文庫、1962)
- 佐藤文子 1986 実存心理検査－PIL－の検討Ⅰ～態度スケールを中心に 岩手大学人文社会学部紀要アルテスリベラレス、35、125-140.
- 沢崎達夫 1984 自己受容に関する文献的研究(1)～その概念と測定法について 教育相談研究、22、59-67.
- 椎野信治 1966 適応の指標としての自己概念の研究 教育心理学研究、14、165-172.
- Simmons, R. G., Rosenberg, F., & Rosenberg, M. 1973 Disturbance in the Self-Image at Adolescence. *American Sociological Review*, 38, 553-568.
- 下山晴彦 1981 青年期における「自分」の確立の研究 東京大学教育学部教育相談室紀要、4、109-118.
- Spranger, E. 1924 *Psychologie des Jugendalters*. Heidelberg: Quelle & Meyer Verlag. (土井竹治訳『青年の心理』五月書房、1973)
- Spranger, E. 1925 *Psychologie des Jugendalters*. Leipzig: Verlag Quelle & Meyer.
- 菅佐和子 1975 Self-Esteem と対他者関係に関する一研究～青年期を対象として 教育心理学研究、23、224-229.
- 鈴木真理子 1974 児童用 Self-Differential Scale の作製 教育心理学研究、22、171-175.
- 鈴木乙史 1978 自己概念と適応(Ⅰ)～Over-achievers と Under-achievers の自己概念の分析 日本心理学会第42回大会発表論文集、1058-1059.
- Thurow, L. C. 1977 Education and Economic Quality. In J. Karabel & A. H. Halsey (Eds.), *Power and Ideology in Education*. New York: Oxford University Press. (近藤博之訳「教育と経済的平等」 潮木守一・天野郁夫・藤田英典編訳『教育と社会変動(下)～教育社会学のパラダイム展開』東京大学出版会、1980、pp. 43-61)
- 津留宏編 1976 青年心理学(改訂) 有斐閣双書(初版1970)
- 上田吉一 1976 自己実現の心理 誠信書房
- 和田秀樹 1996 受験勉強は子どもを救う～最新の医学が解き明かす「勉強」の効用 河出書房新社
- Winkler, R. C. & Myers, R. A. 1963 Some Concomitants of Self-Ideal Discrepancy Measures of Self-Acceptance. *Journal of Counseling Psychology*, 10, 83-86.
- 山田良一 1979 青年期における自我発達の諸相～女子青年の日記分析の試み 日本教育心理学会第21回総会発表論文集、246-247.
- 山田ゆかり 1981 青年期における自己概念(Ⅰ) 日本教育心理学会第23回大会発表論文集、422-423.
- 山田ゆかり 1989 青年期における自己概念の形成過程に関する研究～20答法での自己記述をてがかりとして 心理学研究、60、245-252.
- 山本力 1984 アイデンティティ理論との対話～Erikson における同一性概念の展望 鎌幹八郎・山本力・宮下一博編『アイデンティティ研究の展望Ⅰ』ナカニシヤ出版(pp. 9-38)
- 山村健 1980 危機としての青年期 山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択～高学歴時代の自立の条件』有斐閣選書(pp. 2-33)
- 山根真理 1972 自己像のずれに関する発達の研究 広島女子大学家政学部紀要、7、19-28.
- 依田新 1950 青年の心理 培風館
- 吉川房枝 1960 青年期における自我の形成 教育心理学研究、8、26-37.